

家庭で行なうパンジー、ビオラの種まき

貫井 仁雄(貫井園芸)

貫井百合子(短園28回卒)

私の所では、6～7年前より、パンジー、ビオラの大株作りを行なってきました。これは、パンジー、ビオラを一株ずつ大切に鉢植えで作るという栽培方法です。品種の性質により出来上がりの株の大きさには差ができますが、2006年の春には、ビオラで最大のものは、直径50cmの樽鉢に草姿も乱れず美しく育ちました。この栽培法は、パンジー、ビオラの生育能力を最大限に引き出そうという考え方が、根底にあります。昨年亡くなられた柳宗民先生には、多方面につき多くのご指導を受けました。その柳先生より「スイスで直径1mぐらいのパンジーを見ました。」というお話をうかがったことが、パンジー、ビオラの大株作りのきっかけになりました。

パンジー、ビオラの生育能力を最大限に引き出し、大株を作るためには、幾つかの条件があります。その第1番目の条件は、種まきを成功させることです。パンジー、ビオラは大変ポピュラーな植物なので、家庭での栽培に関して、テレビや雑誌等のマスメディアにとり上げられることは比較的多く、種まきについての情報もしばしば見られます。しかし、それらの情報が必ずしも正しいとは限りません。具体的な例を二つあげてみます。パンジー、ビオラは播種から冬の低温期になるまでの間になるべく株を大きく育てなければなりません。このため、他の秋まき1年草に比べ早い時期に種まきをします。できれば、8月15日～20日ぐらいには播種を行ないたいです。このことは、もはや常識のようにも思えますが、いまだに9月に入ってから、または9月中旬と明記した園芸雑誌を見かけることがあります。また発芽適

温が18℃～20℃のため、クーラーを使い部屋の温度を適温に設定して播種を行なう方法が、マスメディアを通して紹介されていました。およそ1週間という期間、部屋のクーラーをつけ放しにしておくということ自体が実際的ではありません。以前、クーラーをつけた部屋で種まきをしたことがありますが、室内の湿度が低下し、よい結果は得られませんでした。以上の2例は、本来ならば家庭でパンジー、ビオラを播種して楽しもうという一般の趣味家を指導するべき立場の専門家が、マスメディアを通して逆に混乱を起こす様な情報を与えていることを示しています。

近年、温暖化が進み、ますますパンジー、ビオラの播種の難易度は高まっています。このような環境下、家庭でパンジー、ビオラを種まきから楽しもうとしている人々が、できるだけ播種、発芽を成功させるためにはどのような方法が適当なのでしょう。以下に記述する実験はこの問題を解決するために行なわれました。余談になりますが、本来の家業である営利目的のパンジー、ビオラの播種は、温度20℃、湿度80%に設定されたキノコ栽培用の冷蔵室内で行なっています。2006年8月の播種では、発芽率は100%を大きく上回りました。つまり種袋に記載された種の入り数を超える本数の発芽が得られ、栽培の途中で幾分かの苗の廃棄を行ないましたが、結果として計画以上のポット苗ができ、生産過剰になってしまいました。

「家庭で行なうパンジー、ビオラの播種実験」

（発泡スチロールの箱を用い、保冷剤を使う方法）

1 使用した種や用具

- 種 大手種苗会社より、その年の夏に送られてきたパンジー、ビオラの絵袋入り種子12品種。
- ふたつきの発泡スチロールの箱 縦41cm×横48cm×深さ21cm
- 市販の播種用土
- 保冷剤 160gのもの6個
- 温度計 箱内に入れるものと箱の外の温度を測るものとの2個
- 3号黒ポリポット12個

- 園芸用ラベル12枚

2 実験の概略

ふたつき発泡スチロールの箱の中に、凍らせた保冷剤を入れ、内部が20℃前後になるようにします。その中に播種用土を入れた黒ポリポットを置き、種をまきます。ふたをして、発芽を待ちます。発芽までの間、1日に数回、箱内の温度をチェックしました。

また、箱の横にも温度計を置いて箱の外の温度を測りました。温度が高めの時は、頻繁にチェックして、時には保冷剤を凍ったものに交換しました。また、1日に1~2回霧を吹きかけました。このような作業で、温度を20℃前後に保ち、湿度を高めにして、パンジー、ビオラの発芽条件に近い環境作りをしました。

3 実験開始日時と場所

2005年8月19日播種。前日の8月18日に、発泡スチロールの箱を実験場所に置き、保冷剤2個を入れ、内部が20℃ぐらいになることを確認しました。箱の置き場は、北側の窓の近くにしました。窓はほとんど網戸のまま開けた状態でしたが、冷房や扇風機は使用しませんでした。

4 播種の方法

播種用土をポットに入れ、箱の中に置きました。ポットの下から水を吸わせ、土を湿らせ、土の表面には霧を吹いておきました。ハガキぐらいの厚みの紙を二つ折りにして、種をのせ、できるだけ均等になるように種を播きました。ひとつのポットに約30粒ぐらいを目安に播種しました。覆度はごく薄く1ミリぐらいの厚さで行ないました。ポットに品種名を書いたラベルを挿しておきました。並べたポットの脇に温度計と凍らせた保冷剤2個を置いて発泡スチロールのふたをしました。

5 箱内の温度、箱の外の温度、発芽の状態

1日に6~7回の観察を行ないました。その時、箱内の温度が20℃を超え、箱の外の温度も高く、保冷剤も解凍していれば、解凍した保冷剤を凍った保冷剤に交換しました。以下にその観察記録のデータを載せます。

月日	時間	箱内の温度	箱の外の温度	保冷剤の交換やその他の作業
8/19	9:30	30℃	30℃	保冷剤を2個入れ播種する。
	11:00	25℃	32℃	保冷剤を1個追加。合計3個使用。
	12:00	24℃	34℃	3個とも交換
	14:00	23℃	34℃	3個とも交換
	15:30	21℃	33℃	交換せず。
	19:30	22℃	30℃	
	22:00	20℃	31℃	3個交換。
8/20	6:00	23℃	28℃	3個交換。
	9:00	25℃	30℃	霧をかける。
	10:00	19℃	32℃	3個交換。
	13:30	18℃	34℃	3個交換。
	15:30	16℃	34℃	3個交換。
	18:30	20℃	31℃	3個交換。
	21:30	18℃	29℃	3個交換。
8/21	6:00	22℃	29℃	3個交換。
	9:00	20℃	30℃	霧をかける。
	10:30	19℃	32℃	3個交換。
	12:30	16℃	34℃	交換せず。
	14:00	16℃	33℃	3個交換。
	20:00	20℃	30℃	3個交換。
	22:00	17℃	27℃	3個交換。
8/22	6:00	24℃	29℃	3個交換。
	11:00	22℃	29℃	霧をかける。発芽したものがある。
	13:00	18℃	31℃	3個交換。
	15:00	20℃	32℃	1個交換。
	18:00	20℃	32℃	3個交換。
	22:00	20℃	30℃	3個交換。
8/23	6:00	23℃	30℃	3個交換
	8:00	18℃	30℃	交換せず。
8/23	9:30	19℃	31℃	3個交換。霧をかける。

月日	時間	箱内の温度	箱の外の温度	保冷剤の交換やその他の作業
	12:00	18℃	33℃	3個交換。
	15:00	23℃	33℃	3個交換。
	18:00	19℃	30℃	交換せず。
	21:30	21℃	29℃	3個交換。
8/24	6:00	21℃	26℃	3個交換。
	8:30	15℃	26℃	1個減らし2個にする。霧。
	11:30	18℃	28℃	2個交換。
	16:30	20℃	30℃	交換せず。
	18:30	19℃	27℃	3個交換。
	21:30	16℃	27℃	3個交換。
8/25	6:00	17℃	25℃	3個交換。台風接近。
	9:00	17℃	25℃	交換せず。
	10:30	15℃	25℃	1個を取り出し2個とする。
	13:00	17℃	25℃	1個交換。
	15:00	18℃	25℃	交換せず。
	19:30	21℃	25℃	1個交換。
	23:00	21℃	25℃	1個交換。台風通過。
8/26	6:00	22℃	25℃	1個交換。
	9:00	21℃	26℃	1個交換。1個 追加。霧。
	11:30	21℃	30℃	3個交換。
	13:15	18℃	32℃	3個交換。
	16:30	20℃	34℃	3個交換。
	20:00	20℃	34℃	1個取り出し2個交換。
8/27	6:00	20℃	29℃	2個交換。
	10:00	20℃	30℃	1個追加。2個交換。発芽の順調な品種は取り出し日陰で管理。
	13:00	18℃	31℃	3個交換。
	20:00	24℃	30℃	1個取り出し2個交換。
	22:30	20℃	29℃	2個交換。
8/28	6:00	20℃	25℃	2個交換。
	11:00	17℃	25℃	交換せず。午前中曇り。
	13:00	20℃	28℃	1個追加。2個交換。晴れ。
	15:30	21℃	29℃	交換せず。
	20:00	20℃	28℃	3個交換。
	22:30	20℃	28℃	2個交換。
8/29	6:00	19℃	25℃	2個交換。

月日	時間	箱内の温度	箱の外 の温度	保冷剤の交換やその他の作業
	10:30	20℃	28℃	交換せず。発芽した苗を出す
	11:30	17℃	30℃	2個交換。
	13:00	19℃	31℃	交換せず。
	15:00	20℃	32℃	交換せず。
	16:00	20℃	32℃	2個交換。
	18:00	21℃	28℃	すべての発芽した苗を出す。

実験を終了する

考察と後記

データを詳しく見ると、外気温が高くなると発泡スチロール内の温度も上昇することがわかります。朝6時から就寝までの間は、だいたい1時間30分～3時間に1回のペースで、発泡スチロール内の温度を測定しました。保冷剤が解けているときには、凍っている物と交換して、できるだけ箱の中の温度がおよそ20℃ぐらいになるように心がけました。保冷剤を160gの小さいものを複数用意したため、こまめな温度調整ができました。就寝前に、保冷剤を交換しておけば、夜は気温が上昇しないので、起床まで箱内の温度を測定しなくても、朝までほぼ20℃前後を保つことができました。このようなこまめな温度管理の結果、発芽は順調に進み、実験開始から10日後に、すべての品種が発芽率もよく発芽して、実験を終了しました。1日、ほぼ7回の温度チェックが、一般趣味家の方々に負担になるのではないかという考え方もあるかもしれませんが、そもそも発芽条件の環境をととのえること自体がデリケートな側面を持っているのではないのでしょうか。温度チェックは1日7回行なっていますが、その作業にかかる時間は2～3分で、子供や病人の寝ている部屋の温度を確認する程度の作業です。むしろ、発芽を心待ちにする期待で、負担にはならないと思います。また、この実験では十分な湿度を保つことに特に注意を払いました。温度チェックの際、たびたび霧をかけ、土の表面が乾かないように心がけたことも、よい発芽率に結びついたと思います。結論として、発泡スチロールの箱と保冷剤を利用したパンジー、ビオラの播種法は有効であることがわかりました。私は、こ

の方法を恵泉園芸センターの特別講座で紹介しました。受講生3名が、2006年夏にこの方法でパンジー、ビオラの播種を行い成功しています。多くの趣味家の方々に、この方法で、パンジー、ビオラを種から育ててみてほしいと思います。



直径50cmに育ったビオラ